故事成語・ことわざの中訳法について*1 (前)

青木 五郎・馮 任 遠*2

On the Translation of Japanese Phrases of Chinese Origin and Proverbs of Japanese Origin into Chinese

Goro AOKI and Renyuan FENG

Received October 31, 1983.

抄録 日本語の故事成語やことわざの中国語への翻訳には，従前次の三つの方法が用いられてきた。すなわち，

1. 故事成語を出自を同じくする中国語の成語の形に戻す帰原法
2. 中国語の成語やことわざを借りて訳す借用法
3. 意味を説明的に解釈する釈義法

がそれである。われわれは本稿において，これらの三つの方法の外に，

4. 中国語の成語やことわざに似せて作る模造法

の開発を提唱しようとするのであるが，故事成語については，帰原法による翻訳の限界を中心に，ことわざについては，模造法による翻訳の可能性を中心に，日本語の故事成語やことわざのあるべき中訳法について考えてみたい。

索引語 故事成語・ことわざ・帰原法・借用法・模造法

Abstract. Traditionally the following three methods have been used to translate Japanese Phrases of Chinese origin and proverbs of Japanese origin into Chinese.

1. The "return to the origin" method in which Japanese phrases of Chinese origin are translated back into Chinese counterparts of the same origins.
2. The "borrowing" method in which they are translated by borrowing Chinese fabled phrases and proverbs.
3. The "interpreting" method in which their meanings are explained in Chinese.

We propose a fourth method:

4. The "camouflaging" method in which they are rendered into Chinese in such a way that they look like real Chinese fabled phrases and proverbs.

In this paper, in particular, we will consider how Japanese phrases of Chinese origin and proverbs of Japanese origin are to be translated into Chinese by studying the

limitations of the "return to the origin" method in dealing with phrases of Chinese origin and the possibility of the "camouflaging" method in dealing with proverbs of Japanese origin.

Key Words. Phrase of Chinese origin, Proverb, "Return to the origin" method, "Borrowing" method, "Camouflaging" method.

はじめに

今日中国で行なわれている日本の故事成語やことわざの中訳法を見ると，故事成語については，それらが中国の典籍や漢訳仏典などに典故をもつものが多いところから，もとの中国語の形に戻す訳法が多く用いられ，ことわざについては，日本のことわざと同じ内容を表わすものを中国のことわざの中から捜し出して解釈に充てるという方法が多く用いられているように思われる。われわれは前者のような訳し方を帰原法と呼び，後者のような訳し方を借用法と呼ぶことにしたい。もちろん，日本の故事成語やことわざの中には，帰原法や借用法では訳せないものも数多くあるわけで，その場合は単に日本語の意味を散文的に解釈する（こういう方法を釈義法と呼ぶことにする）ものがほとんどで，われわれが本稿で志向しようとする，中国の成語やことわざらしい表現で訳出する訳法（こういう方法を模造法と呼ぶことにする）は，従来ほとんど顧みられていない。

日中両国の文化交流がいよいよ深まる中で，言語や文化の重要な一部である故事成語やことわざの翻訳の仕事も，次第に重要視されるに違いない。本稿は，日中両国の故事成語やことわざのそれぞれにもつ歴史性や言語としての特質をふまえながら，日本の故事成語やことわざのよりよい中国語訳の在り方について考えてみたい。

第一章　故事成語の再訳法について

第一節　故事成語再訳法の三様

いわゆる故事成語の定義や範疇については，いろいろな考え方ができると思うが，本稿ではとりあえず，中国の典籍及び漢訳仏典に出自をもつ成語（名言・名句を含む）ということにしておきたい。

今日行なわれている故事成語の中訳法を調べてみると，先にも記したように，最も多く見られるのが，もとの形に戻す帰原法である。ここでもとの形に戻すというのは，それぞれの成語をその出典の表現に戻すことをいうのではなく，今日中国で伝承されている成語の表現を使って翻訳することをいうのである。したがって，その中には，

〔百聞は一見に如かず〕〈百闻不如一见〉（以下，日本の成語は〔 〕で，中国の成語は〈 〉で表わす）

のように，中訳が《漢書・趙充国伝》「百聞不如一見，兵難隃度」の出典と同じものもあれば，

〔出藍の誉れ〕〈青出于蓝而胜于蓝〉

のように，《荀子・勧学篇》「青取之于藍，而青于藍」の出典とは多少異るものもあり，

〔杞憂〕〈杞人忧天〉

のように，《列子・天瑞》の故事を要約しているものなどいろいろあるが，ここではこれらを一括して帰原法と呼ぶことにしたい。

こうした帰原法による訳出は，同じ典拠をもつ故事成語が，日中両国で今日なお同じ意味に用いられていることが多いことからして，一般法則としてはたしかに適切な方法といってよいだろう。しかし，「江南の橘も，江北に植えれば枳となる」の古諺の如く，日本にのみ伝承をもつものや，同じ故事成語でも伝承の過程で，その意味や用法に何らかの相違が生まれたものなどもまた少なくないのであって，こうした成語の訳出には帰原法以外の方法によらなければならないだろう。従前，こうした場合の訳としては，中国の成語やことわざの中から日本の成語に最もふさわしいものを捜してその翻訳にあてる借用法と，対応する成語やことわざが見出せない場合に，その意味を解釈するにとどめる釈義法とが用いられてきた。

○〔自業自得〕（《正法念経・七》）（　）内は出典を示す。以下同じ。

の翻訳に，《景徳伝灯録》に典故をもつ

○自作自受。《商务印书馆・日汉辞典》（以下《日汉辞典》と記す）

の成語を用いるのは，前者の例であり

○〈琴瑟相和〉（《詩経・小雅・常棣》）

の翻訳に，

○夫婦感情融洽。《日汉辞典》

と語義の解釈のみを与えているのは，後者の例である。

この故事成語の中訳に際して用いられている三つの方法は，それ自体は決して不当なものではないのであるが，問題は個々の成語に対する適用の仕方が，当を得ているか否かなのであって，今日行なわれている訳文を検討してみると，日中両国の成語の意味の厳密な吟味を怠ったがために，その適用を誤ったものが少なくないのである。たとえば，

〔毛を吹いて疵を求む〕（《韓非子・大体》）

を帰原法を用いて，

○吹毛求疵。《日汉辞典》《辽宁人民出版社・新日汉辞典》（以下《新日汉辞典》と記す）

と訳したのでは，日本語の

○あらさがしをする。また人の欠点を指摘して，かえって自分の欠点を暴露する。《広辞苑》

という後半の部分は訳出できていないことになるし，

〔捲土重来〕（《杜牧・題烏江亭詩》）

の成語を，やはり帰原法を用いて，

○卷土重来。《日汉辞典》《新日汉辞典》

と翻訳したのでは，

○比喻失败之后，重新恢复势力。（多用于贬义）《上海教育出版社・汉语成语辞典》（以下《上海・成语》と記す）

と説明されるように，中国語の否定的なニュアンスが出てしまってまずいだろう。つまり，前者には，日本語の派生義を説明するために，たとえば，

○害人反害己。

という釈義法による訳語を，また後者には，日本語の〔捲土重来〕の成語により近い意味をもつ，

○重整旗鼓。

という他の成語を借用して解釈に充てねばならなかったわけである。

これらはほんの一端であって，こうした誤りが日中両国の故事成語の意味や用法の厳密な吟味を怠ったところから生じたものであることを他山の石として，以下，日中両国の故事成語を広く比較考察することによって，日本の故事成語のよりよい中訳法の在り方について考えてみたい。

なお，われわれは故事成語やことわざの中訳法として，如上の三つの方法のほかに，中国の成語やことわざに似せて訳語を作る模造法の開発を提唱したいと考えている。この模造法とはたとえば，

○〔羹に懲りて膾を吹く〕（«楚辞・九章・惜誦»）

という成語に見合う中国の成語やことわざが見出せない場合，すぐに語義を散文的に解釈する釈義法を用いるのではなく，

〈热汤烫了嘴，凉菜吹三吹〉（出典を示さないものは筆者らの試訳である。以下同じ）

のように，中国語の成語やことわざを模して作る，いわば借用法と釈義法の中間に位置する訳出法である。ただ，この模造法による訳出は，故事成語よりもことわざの方により有効性を発揮すると考えられるので，その詳細については第二章で論述することにしたい。

第二節　帰原法適用上の問題点

先にものべたごとく，同じ典故をもつ日中両国の成語は，当然のことながら，今日なお同じ意味で使われているものが圧倒的に多いわけで，こうした場合は帰原法による訳出が適切であることは言うまでもない。しかし，出典や意味は同じでも，それぞれの国の言語環境や言語の特性によって，伝承されている成語の型（語型）に相違が見られるものもまた少なくないのであって，帰原法の適用にあたっては，こうした語型の相違に対する配慮が十分になされなければならないだろう。

以下，両者の間にみられる語型の相違を，後述する意味に若干の相違のあるものも含めて，その代表的なものをいくつかの面から指摘してみたいと思う。

1. 日本語では二字成語として伝えているが，中国語では四字成語として伝えているもの。

〔杞憂〕　〈杞人忧天〉　（«列子・天瑞»）
〔守株〕　〈守株待兎〉　（«韓非子・五蠹»）
〔蛇足〕　〈画蛇添足〉　（«戦国策・斉策»）
〔跼蹐〕　〈跼天蹐地〉　（«詩経・小雅・正月»）
〔矛盾〕　〈自相矛盾〉　（«韓非子・難一»）
〔望蜀〕　〈得隴望蜀〉　（«後漢書・岑彭伝»）
〔完璧〕　〈完璧归赵〉　（«史記・廉頗藺相如伝»）

などがそれである。中国人にとって，成語とは通常四字あるいはそれ以上の字数のものが意識されているようで，〔杜撰〕（«野客叢書»）〔推敲〕（«唐詩紀事»）〔牛耳を執る〕〈执牛耳〉（«左伝・哀公十七»）〔五里霧（中）〕（«後漢書・張楷伝»）など日本語では故事成語と考えられて

いる語，も一般の成語辞典にはとられていない。

2. 文字一字を違えて伝承しているもの。

〔金科玉条〕　〈金科玉律〉

《揚雄・劇秦美新》「懿律嘉重，金科玉条」を典故とするが，中国では《官场现形记・43回》に「老伯大人的议论，真是我们佐班的玉律金科」と見えるごとく，〈玉律金科〉あるいは〈金科玉律〉の形で伝えている。

〔不俱戴天〕　〈不共戴天〉

《礼記・典礼上》「父之讎，弗与共戴天」を典故とするが，日本語では「共」を「俱」に改めて伝えている。

〔杯中の蛇影〕　〈杯弓蛇影〉

《応劭・風俗通義》《晋書・楽広伝》の，酒杯に映った弓の影を蛇だと見誤って病気になる故事を典故とする成語であるが，中国では《黄遵憲・感事诗》にも「杯弓蛇影负奇冤」と見える如く，「杯弓蛇影」の形で伝えている。

〔月下氷人〕　〈月下老人〉

〈月下老人〉は《続幽明録・定婚店》の，月夜に会った老人から将来の妻を予言される物語に由来する語であるが，日本語では，〔月下老〕〔月下老人〕という語もあるが，《晋書・索紞伝》にみえる夢の中にあらわれた氷上の人が婚姻の媒酌人になるという物語を結びつけて，「月下氷人」という語を作って伝えている。

〔多多益ゝ弁ず〕　〈多多益善〉

漢の名将韓信が，高祖から「お前はどの位の兵を統率できるか」と尋ねられて，「多ければ多いほどよい」と答えた故事によるが，日本語では，《漢書・韓信伝》の「如臣多多益弁耳」を伝承しているのに対し，中国語では，《漢書》のもとになった《史記・淮陰侯伝》の「臣多多而益善耳」の方を伝承している。

〔多岐亡羊〕　〈岐路亡羊〉

《列子・説符》の，分れ道が多いために羊を見失うのを見て，学問の窮め難きを嘆じた故事によるが，共に原典の「楊子曰，嘻，亡一羊，何追者之衆，隣人曰，多岐路」の語によりながら，日本語は「多岐」を，中国語は「岐路」の二字をとって伝えている。

〔異口同音〕　〈异口同声〉

《宋書・庾炳之伝》の「今之事迹，異口同音，便是彰著，政未测得物之数耳」に出自する成語であるが，中国語では，《鲁迅・华盖集・这个与那个》にも「公论家便异口同声，称之曰傻子」と見えるが如く，「异口同声」の形で伝えている。

〔堅忍不抜〕　〈堅韌不抜〉

《蘇軾・鼂錯論》の「不唯有超世之才，亦必有堅忍不抜之志」に出自する成語であるが，中国語では「忍」(rěn)を音の近い「韧」(rèn)（しなやかで強い）に変えた〈堅韌不抜〉の形で伝承している。

3. 前後が転倒していたり，交錯していたりするもの。

〔明窓浄几〕　〈窗明几浄〉

《欧陽修・試筆》の「蘇子美常言，明窗淨几，紙硯筆墨，皆極精良，亦自是人生一楽」に出自する成語であるが，中国語では《金聖嘆・西廂記巻首序》にすでに「窗明几淨，此何処也」と見える如く，主述構造の句になおして伝えている。

〔粉骨砕身〕　〈粉身砕骨〉

《蔣防・霍小玉伝》の「平生志願，今日獲従，粉骨砕身，誓不相舎」に出自する成語であるが，中国語では，《紅楼夢・第94回》にすでに「要是上头知道了，我們这些人就要粉身砕骨了」と見える如く，一般には〈粉身砕骨〉という形で用いている。

〔右顧左眄〕　〈左顧右盼（眄）〉

《曹植・与呉季重書》の「左顧右眄，謂若無人，豈非君子壮志哉」に出自する成語であるが，日本語では一般には「左」「右」を入れ変えて用いている。

4. 典故の対になる語のそれぞれ一方を伝承しているもの。

〔屋上に屋を架す〕　〈床上安床〉

《顔氏家訓・序致》の「理重事複，遞相模效，猶屋下架屋，床上施床也」に出自する成語であるが，日本語では，前半の部分の「屋下」を「屋上」に改めて伝えているのに対し（《朱子全書・道統一》の「非但架屋上之屋，畳床上之床而已也」によるか？），中国語では後半の部分を伝えている。

〔千慮の一失〕　〈千虑一得〉

《晏子春秋・雑下》の「嬰聞之，聖人千慮，必有一失，愚者千慮，必有一得」，あるいは《史記・淮陰侯伝》「臣聞，智者千慮，必有一失，愚者千慮，必有一得」に出自する或語であるが，日本語では前半の部分を主として伝えているのに対し，中国では〈智者千虑，必有一失〉という成語もあるにはあるが，《毛沢東・新民主主义论》にも「我们的東西，只当作引玉之砖，千虑之一得」と見える如く，主に後半の部分を伝えている。

以上，日本語と中国語の同一典故をもつ成語の伝承語形の相違について，その典型的なものいくつかを挙例して説明したが，以上のほかにも，たとえば

〔背水之陣〕　〈背水一战〉　（《史記・淮陰侯伝》）

〔虎穴に入らずんば虎子を得ず〕　〈不入虎穴，焉得虎子〉　（《後漢書・班超伝》）

〔法螺を吹く〕　〈大吹法螺〉　（《金光明経・賛嘆品》）

などのように，それぞれの言語の語構成や語調などの関係で伝承の形を異にしているものもあるわけで，帰原法を用いた故事成語の再訳には，こうした語形の相違を十分に考慮しなければならないだろう。

第三節　帰原法の限界と他の中訳法の適用

日中両国の故事成語を比較してみると，上にのべた語形の相違だけではなく，今日における伝承の有無（或は習熟度）をはじめとして，同じ成語でも伝承の過程でその意味や用法に何らかの相違が出てきているものも少なくないのであって，こうした場合には帰原法による訳出だけでは用を足さないわけで，すでに第一節でのべたように借用法・釈義法・模造法といった訳法の適切な応用が要請されなければならない。今日行なわれている故事成語の中訳には，こうした面に対する配慮が不十分のように思われる。以下，いくつかの面から帰原法の限界とあるべき中訳法について考えてみたい。

1. 伝承の有無・習熟度の問題

日本で用いられている故事成語が，中国では今日全く用いられないか，あるいはほとんど用いられない場合，こうした成語の翻訳は，それが中国の典籍に出自するからといって，帰原法を用いて訳出するのは適当ではなく，中国語の他の故事成語か一般の成語の中から，日本語の意味に合うものをさがして訳にあてるか，それができない場合は，模造法か釈義法による訳出を考えなければならない。例をあげてみよう。

〔馬耳東風〕　〈耳边风〉〈对牛弹琴〉

〔馬耳東風〕は《李白・答王去一詩》「有如東風射馬耳」に出自する成語であるが，今日の中国では殆んど用いられず，代って《杜荀鶴・贈題兜率寺閑上人院詩》「万般無染耳辺風」に典故をもつ〈耳边风〉が用いられている。また《荘子・斉物論・郭象注》「是猶対牛弾簧耳」を少しく変えて伝承する〈对牛弹琴〉なども，この語の訳として借用できるだろう。

〔竜頭蛇尾〕　〈虎头蛇尾〉

《五灯会元・七》「大小祖師，竜頭蛇尾」などに典故をもつ〔竜頭蛇尾〕の語は，中国語では殆んど用いられず，代って《康進之・李逵負荊》に「这厮狗行狼心，虎头蛇尾」と見える〈虎头蛇尾〉の語が用いられている。従って，〔竜頭蛇尾〕の中訳には，〈虎头蛇尾〉を充てるのが適当だろう。

〔一心不乱〕　〈专心致志〉

《阿弥陀経》「執持名号，一心不乱」などに典故をもつ〔一心不乱〕の語は，中国では用いられず，これに当る語としては，《孟子・告子上》「不専心致志，則不得也」に出自する〈专心致志〉が，

○一心一意，集中精力。《江苏人民出版社・成语词典》（以下《江苏・成语》と記す）と説明されるように，適当な訳であろう。

〔玉石混淆〕　〈鱼龙混杂〉

《抱朴子・尚博》の「真偽顚倒，玉石混淆」に出自する〔玉石混淆〕は，中国では用いられないから，《紅楼夢・第94回》に「現在人多手乱，魚龙混杂」などと見える〈鱼龙混杂〉が，この語の訳として適当だろう。ただ，〔玉石混淆〕が人間・事物について用いられるのに対して，〈鱼龙混杂〉が

○比喩坏人好人混杂在一起，成分复杂。（《上海・成语》）

と説明されるごとく，人間についてのみ言う語であることを注記することは必要である。

〔乾坤一擲〕　〈孤注一掷〉

《韓愈・過鴻溝詩》の「真成一擲賭乾坤」に出自する〔乾坤一擲〕の語は，中国では用いられないから，これとよく似た《元史・伯顔伝》の「今日我宋天下，猶賭博孤注，輸贏在此一擲耳」に典故をもつ〈孤注一掷〉の語を借用して訳に充てるのがよいだろう。ただ，〈孤注一掷〉の語が，

○比喩在危急时用尽所有力量作最后的一次冒险。多含贬义。（《上海・成语》）

と説明されるごとく，マイナスのニュアンスで使われる場合が多いことは注記すべきであろう。

〔精神一到何事か成らざらん〕　〈有志竟成〉

《朱子語類・学二》の「陽気発処，金石亦透，精神一到，何事不成」に出自する〔精神一到云々〕の語は，中国では用いられないから，《後漢書・耿弇伝》の「有志者事竟成也」に出自する〈有志竟成〉を充てるのがよいだろう。ただ，「有志」だけでは「精神一到」の強いニュアンスが出ない嫌いがあるから，釈義法をとり入れた〈精誠所至，何事不成〉という訳出も可能かもしれない。

〔羹に懲りて膾を吹く〕

第一節で例示したように，

《楚辞・九章・惜誦》の「懲於羹者而吹韲兮」に出自する成語であるが，中国では殆んど用いられない。

○一度失敗したのに懲りて用心しすぎることのたとえ。《岩波書店・国語辞典第三版》（以下《岩波・国語》と記す）の意味を表わすのに，

〈一朝被蛇咬，三年怕井縄〉

ということわざがあり，これを用いるのも一訳であるが，日本語のことわざにはまた，

〔蛇に噛まれて朽縄におじる〕

というのもあって，これはその方に充てるとして，〔羹に懲りて云々〕の訳としては，すでに第一節で例示したように，模造法を用いて

〈热汤烫了嘴，凉菜吹三吹〉

とでも訳出したらどうであろうか。

〔始めは処女の如く，後は脱兎の如し〕

《孫子・九地》の「始如処女，敵人開戸，後如脱兎，敵不及拒」に出自する成語であるが，これも今日の中国では用いられない。模造法による

〈始如深閨女，后似下山虎〉

という訳は，どうであろうか。

〔先ず隗より始めよ〕

《戦国策・燕策》の「今王誠欲致士，先従隗始」に出自する成語であるが，今の中国では殆んど用いられない。また，たとえ用いられても，

○〈先自隗始〉以先用我郭隗為开端。表示自我推荐。（《江苏・成语》）

という成語本来の意味であって，日本語の

○転じて，言い出した当人から始めるのが最も得策だ。《三省堂・新明解国語辞典第二版》（以下《三省堂・新明解》と記す）の意味を表わすには，釈義法を用いて

〈谁说的谁先做个样子〉

とでも訳出するほかはないであろう。

2. 典故は同じで意味が全く異なるもの

同じ典故をもちながら，伝承の過程で日本語・中国語のいずれかが，もとの意味と全く違う意味に用いられるようになっている成語は，これを帰原法を用いて訳すことはできないのであって，他の三つの方法を適用した再訳を考えなければならない。例をあげてみよう。

〔一刀両断〕

〔一刀両段〕とも言い，《五灯会元》や《朱子語類》に典故をもつ成語であるが，日本語で

は，

○ひとたちで，まっぷたつに斬ってしまうこと。また，決断のすみやかなさま。（《岩波・国語》）

の意に用いられるのに対し，中国語では，

〈一刀两断〉

○比喻坚决地断绝关系。《商务印书馆・现代汉语词典》（以下《汉语辞典》と記す）

のように，専ら「（悪い）関係をたち切る」意味に用いられ，日本語の意味と同じくない。したがって，この語の訳としては，帰原法による《日汉辞典》などの訳は不適当であって，

①一劈两半。②果敢果断。

とでも訳すべきところであろう。

〔喪家の狗〕

《史記・孔子世家》に出自する成語であるが，日本語では，

○〔飼主が死んだ宿無し犬の意〕元気が無くやせ衰えている様子。（《三省堂・新明解》）

のように，「宿無し犬」の様態（元気がなくやせている）に重点をおいて伝承しているのに対し，中国語では，

〈丧家之犬〉

○比喻失去靠山、到处乱窜、无处投奔的人。（《汉语词典》）

のように，「喪家」（宿無し）の方に重点をおいた理解をしており，日本語と同じくない。したがって，この語の訳としては，《新日汉辞典》の

①丧家犬，丧家之犬。②㸚三相，象㸚个三。

という訳には，苦心のあとがみえるが，①は誤解をさけるため，出典として説明すべきだろう。

なおこの成語は，魯迅が〈"丧家的""資本家的乏走狗"〉《二心集》という文を書いてからは，「頼りを失った悪勢力の手先」といった意味で使われることが多い。

〔爾（なんじ）に出づるものは爾に反る〕

《孟子・梁恵王下》の「曽子曰，戒之戒之，出乎爾者，反乎爾者也」に出自する成語であるが，日本語では，

○自分の行った事の報いは自分にもどってくる。禍福善悪は皆，みずから招いた結果であること。《東京堂・故事ことわざ辞典》（以下《東京堂・故事》と記す）

と，本義のままで用いられているのに対し，中国では，

〈出尔反尔〉

○现指前后言行自相矛盾，反复无常。《江苏・成语》

のように，前後の言行が自家撞着である意に用いられる。したがって，この成語の訳としては，帰原法は用いられないのであって，《涅槃経》や《水滸伝・第45回》などに典故をもつ，

○种瓜得瓜，种豆得豆。

を用いるか，或はもっと直接的に，

○善有善报，恶有恶报。

などと訳出してもよいだろう。

〔七転八倒〕

〔七顚八倒〕とも書き，《五灯会元》や《景徳伝灯録》に典故をもつ成語であるが，日本語では，

○苦痛のため，のた打ち回ること。《岩波・国語》

の意味で用いられているのに対し，中国語では，

〈七顚八倒〉

○形容非常纷乱。《内蒙古・成语》

の説明のように，非常に乱雑なさまの形容に用いられる（ただ，今日ではこの語は余り使われないようで，同じ意味を普通〈乱七八糟〉の語で表わしている)。したがって，日本語の〔七転八倒〕の意味としては，釈義法を用いた

○痛得满地打滚。

といった訳が考えられなければならないだろう。

〔草を打って蛇を驚かす〕〔草を打って蛇に驚く〕

《酉陽雑俎》の「汝雖打草，我已驚蛇」の語に基づく成語であるが，日本語では，

○①何気なくしたことが意外な結果を招くたとえ。②あるひとりを懲らして，これと関係のある他の人を戒めるのをいう。《東京堂・故事》

の意で用いるのに対し，中国語では，

〈打草惊蛇〉

○比喻行动不谨慎，使对方有所察觉，有所准备。《商务印书馆・汉语成语小词典》（以下《商务印・成语》と記す）

のように，不意打ちをかけようとして，不用意な行動のために先方に気づかれ警戒される喩えに用いられる。したがって，これも帰原法では訳出できないわけで，日本語の①の意味は，

①一着不慎，祸从天降。

と模造法によって訳出し，②の意味は中国語の他の成語，

②杀一警百。《汉书・尹翁伝》。杂鸡吓猴。《官场现形记・第53回》

などを借用して訳すべきであろう。

3. 典故が同じで意味に一部ずれがあるもの

日中両国の故事成語の中には，同じ典故をもちながら，2に挙げた例ほど極端な意味の相違はないが，伝承の過程で意味の一部やニュアンスに若干のずれがでてきているものも少くない。こうした成語の翻訳も，単純に帰原法を用いて行ったのでは，やはり適切さを欠くのであって適宜他の三つの方法を援用して訳出しなければならない。例をあげてみよう。

〔毛を吹いて疵を求める〕

《韓非子・大体》の「不吹毛而求小疵，不洗垢而察難知」に出自する成語であるが，日本語では，

○人の欠点を強いて指摘して追求する。あらさがしをする。また人の欠点を指摘して，かえって自分の欠点を暴露する。《岩波書店・広辞苑第二版》（以下《広辞苑》と記す）

のように，本義にない「かえって自分の欠点を暴露する」という派生義があるのに対し，中国語では，

〈吹毛求疵〉

○比喩故意挑剔別人的缺点、错误。《上海・成语》

と，本義のままで用いている。したがって，この成語の訳としては，帰原法をそのまま適用したのでは不十分であって，

①吹毛求疵。②害人反害己。

と二つの訳をしておく必要があるだろう。

〔意味深長〕

《朱熹・論語序説》に引く程子の語「読之愈久，但覚意味深長」などに典故をもつ成語であるが，日本語では，

○ある表現の示している内容や趣が深く，含蓄があること。また，表面の意味のうらに別な意味が隠れていること。《小学館・日本国語大辞典》（以下《小学館・大辞典》と記す）

のように，後半の意味が派生しているのに対し，中国語では，

〈意味深長〉

○指文章、言谈含意深刻，耐人寻味。《江苏・成语》

と本義のままで用いている。したがって，これも帰原法を用いたのでは前半の意味しか表わせないのであって，

①意味深长。②故意卖关子，不露实情。

とでも訳しておくべきだろう。

〔千軍万馬〕

《南史・陳慶之伝》の「名軍大将莫自牢，千兵万馬避白袍」などを典故とする成語であるが，日本語では，

○①多くの軍兵と軍馬。大軍。②何回も戦場に出て戦いの経験が豊かなこと。《岩波・国語》と，②の派主義をもつのに対し，中国語では，

○形容兵马很多。也形容队伍雄壮或声势浩大。《上海・成语》

と，日本語の①の意味だけで用いられている。したがって，この成語の中訳としては，《資治通鑑・後唐紀》の「身経百戦，所得不過一州」を出自とする〈身经百战〉を援用して，

①千軍万马。②身经百战。

と訳出しなければならないだろう。

以上は，中国語では本義に忠実に用いられるのに対し，日本語の方に新たな意味が派生した例であるが，その逆の場合もあるわけで，次にその例をあげてみよう。

〔明哲保身〕〔明哲身を保つ〕

《詩経・大雅・蒸民》の「既明且哲，以保其身」に出自する成語であるが，日本語では，

○かしこくて，物事によく通じた人は身を誤ることがない。《小学館・大辞典》

と，本義のままで用いられているのに対し，中国語では，

〈明哲保身〉

○原指明于事理的人善于自保。后指只顾个人利益，不坚持原则的处世态度。《江苏・成语》

のように，自己の利益だけを顧る利己的な生き方をいう否定的なニュアンスをもつ語として用いられることが多い。特に，毛沢東が《反対自由主义》の中で「事不关己，高高挂起，明

知不对，少说为佳，明哲保身，但求无过，这是第三种人」とのべてからは，そうした使い方が一般的になったようである。したがって，この場合も，帰原法では誤解を招きやすく，さりとて借用法や模造法による適切な訳も考えにくいから，

○明智的人善于自保。

と釈義法を用いて訳さざるを得ないだろう。

〔守株〕〔株を守る〕

周知のように，《韓非子・五蠹》の説話に基づく成語であるが，日本語では，

○いたずらに旧慣を守って融通に乏しいこと。《広辞苑》

のように本義で用いられるのに対し，中国語では〈守株待兎〉の形で，

〈守株待兎〉

○原是韓非对墨守成规的讽刺。后多比喻不主动努力争取，而希望得到意外收獲。《江苏・成语》

のように，努力しないで僥倖を願うという意味にも用いられている。したがって，この場合も帰原法では適切ではなく，上の中国語の説明にも用いられている

○墨守成规。

という成語か，《宋史・欧陽脩伝》の「士因陋守旧，論卑気弱」に出自する成語

○因陋守旧。

を，訳に充てるのがよいだろう。

更に，日本語と中国語で意味やニュアンスに若干のずれが見られるものの例をいくつか挙げてみよう。

〔捲土重来〕

前にもふれたように，《杜牧・題烏江亭詩》の「江東子弟多才俊，巻土重来未可知」に出自する成語で，日本語も中国語も，意味としては，

○（戦いに）一度敗れた人が，また勢いを盛り返して来ること。《三省堂・新明解》

〈巻土重来〉

○形容失则后集中所有力量又猛扑过来。《上海・成语》

と，ほとんど変わりはないが，日本語では，「捲土重来を期します」などと自己の決意を示す肯定的な用法が多いのに対し，中国語では，

○比喻失敗之后，重新恢复势力。（多用于貶义）《商务印・成语》

と説明される如く，否定的な意味に用いられることが多いのである。したがって，この語の中国語訳としては，

○重整旗鼓。

という別の成語を借用して充てるのがよいだろう。

〔間髪を入れず〕

《枚乗・上書諫呉王》の「其出不出，間不容髪」に出自する成語であるが，日本語では，

○ほとんど間をおかず，すぐに。《岩波・国語》

とやや派生して副詞的に用いられるのに対して，中国語では

〈間不容发〉

○比喩情勢危急之至，生与死、成功与失败极为接近。《江苏・成语》

と，日本語の同じ典故をもつ〔間一髪〕〔危機一髪〕などと同じ意味に用いられている。したがって，中国語の〈間不容发〉は，日本語の〔間一髪〕〔危機一髪〕の訳語に用いるのがよいのであって，〔間髪を入れず〕の訳としては，《陳琳・答東阿王箋》の「拂鐘無声，応機立断」に出自する。

○应机立断。当机立断。

などの成語を充てるのがより適切だろう。

〔粉骨砕身〕

《蒋防・霍小玉伝》の「平生志願，今日獲従，粉骨砕身，誓不相舍」などに典故をもつ成語であるが，日本語では，

○（骨を粉にし身を砕いて）力の限り努力すること。《岩波・国語》

のように，努力することを強調するために用いられるのに対し，中国語では，多く〈粉身碎骨〉の形で，

〈粉身碎骨〉

○身骨粉碎。常指为某种目的丧失生命。《江苏・成语》

○全身粉碎而死。《内蒙古・成语》

のように，死ぬことを強調した表現に用いられる。したがって，日本語の〔粉骨砕身〕の訳としては，《西遊記・第２回》に「是我等舍死忘生，与他争斗」などと見える

○舍死忘生。

の成語の方がより近いのではないだろうか。

以上，日本語の故事成語を形式・内容の両面から中国語のそれと比較することによって，その中国語訳の在り方を考察・試行してきたのであるが，ここに掲げたものは，なお，その一斑に過ぎない。今後は更に，個々の故事成語について，上述のような見地からの点検が加えられる中で，よりよい，より正確な中国語訳が志向されなければならないだろう。

注

＊1　本稿は，青木が北京外国語学院の招聘により当学院に出向中，馮が青木の指導を受けて作成し，1981年７月に北京外国語学院に提出した修士論文「故事成語・ことわざの中訳法を論ず」をもとに，更に補訂を加えたものである。

＊＊2　1981年７月，北京外国語学院日本語学部修士課程修了。現在，西安外国語学院講師。1983年10月より１年間，京都府立大学交換教師として来日中。